

特集を企画するにあたって

下島 直樹

慶應義塾大学医学部 小児外科

Introduction

Naoki Shimojima

Department of Pediatric Surgery, Keio University School of Medicine

小児の消化管疾患は閉鎖、狭窄といった器質的な異常や腸管運動障害、便秘といった機能的な異常、また、新生児（特に超低出生体重児）に起こりうる腸管壊死、消化管穿孔、捻転など、その疾患、病態は様々です。正しい画像診断のために、小児においてはまだまだ内視鏡検査よりも単純 X 線撮影や造影検査による評価のウエイトが高く、その診断力を我々は常に求められます。今回、多様な消化管疾患の中から、一般的によく聞く疾患や病態の画像のみならず、腸管運動障害をきたす稀な疾患としてのヒルシュスプルング病類縁疾患も含めて特徴的な画像を紹介したいと思いました。

まず柳先生には小児の小腸病変の評価のための小腸造影について、その準備、方法も含めて丁寧に紹介していただきました。難しいイメージのある小腸造影ですが、この論文を読むと自分もやってみようという気になると思います。

次に新生児科の賀来先生には、新生児に見られる緊急性の高い消化管疾患として、腸回転異常症に伴う中腸軸捻転、NEC、FIP などの写真をたくさん選んでいただきました。時々やってくる緊急症例を見逃さないためにも貴重な写真集として価値の高い内容になっています。

住田先生には難治性の運動障害を示すヒルシュスプルング病類縁疾患のうち hypoganglionosis について、初期の管理方法によってその後の機能と形態に大きな差が出てくることを示していただきました。とても貴重な症例の画像です。

高野先生には直腸肛門機能検査のスペシャリストとして、排便造影を中心に具体的なデータとともに詳細に解説していただきました。なかなかスタンダードを学びにくい検査法だけに、日常臨床において大変参考になる内容です。

そして最後に放射線技師の立場から、中村さんに被ばく線量を減らす工夫について紹介していただきました。パルス透視、グリッド脱着など、臨床医にとっては聞き慣れない内容ですが、画質を担保しつつ簡単に被ばく線量を下げ方法として大変有益であることが分かります。

執筆を快諾してくださった 5 人の先生方には心より感謝いたします。すべて、今日からすぐに臨床に役立てることの出来る内容ばかりです。今号から本誌はデジタル化されました。皆さんにとってこの魅力ある特集号が「デスクの本棚に置いておきたい 1 冊」ならぬ「デスクトップに置いておきたい 1 冊」になることを期待しています。